

凶々しい奴

(全)

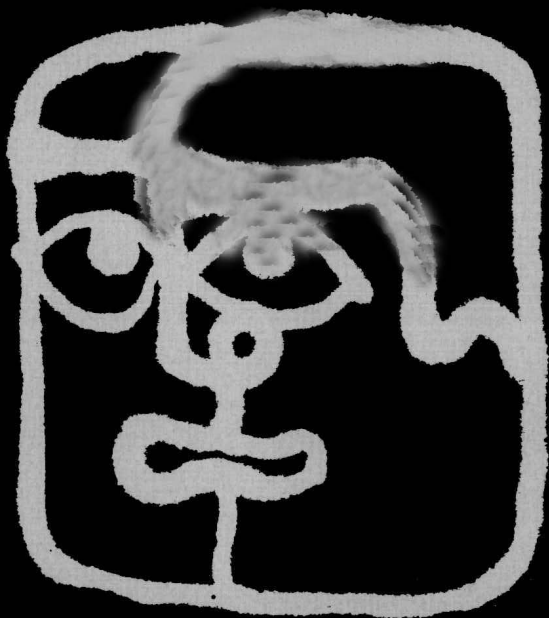
柴田錬三郎



図々しい奴

(全)

柴田錬三郎



図々しい奴

《検印省略》

昭和四十八年三月十五日 印刷
昭和四十八年三月三十日 発行

定価 五八〇円

著者 柴田錬三郎
発行者 豊島 激
印刷者 菅生 定祥

発行所

株式会社

光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(三三)〇二三八番
振替東京一二九一三番

零丁・乱丁はお取替いたします。

0093—041401—2265

目次

序の章

三

天の章

四五

地の章

一七七

人の章

三二三

装幀 難波淳郎

序の章

大正八年十二月三十日、日本三大名園のひとつである岡山後楽園の裏手にある馬小屋で、ひとりの男の子が生まれた。

父親は六十七歳、母親は十九歳であった。

この世に生を享ける条件としては、最低であったが、産声はたいへん勢いがよかった。とりあげた近所の婆さんが、

「くしゃみと屁まで一緒にやりくきったんじゃあが……」

と、皆に報らせたことだった。

父親の戸田朝吉は、備前焼きで一生をついやした職人であったが、よほど不器用なたちに生まれついたとみえて、狸でも布袋でも、何をつくっても、自分の顔に似かよってしまい、どうにも売物にならないままに、腰がまがってしまった。

そのまがり腰を、どうのばしたか、亡妻の姪を、うっかりはらましてしまったのである。

枯木のように瘦せさらばえた老爺が放ったひとたらしの液体の中に、生命の種がひそんでいたことは、かまびすしい岡山市民たちにとって、おあつらえ向きの話題であった。

二年ばかり前に、元岡山城主伊勢田侯爵のおん曹子が、いまだ第六高等学校の生徒のふんざいで、四十近い未亡人の生花師匠に子を生ませた事件があったが、それにまけぬくらいの評判をとった。

朝吉は、その夜、いつの間にか姪の須佐代がいなくなったのに気がついて、あわてふためいて、さがしまわったあげく、わが家と林をひとつへだてた馬小屋の中から、陣痛の呻きをきいたのであった。

馬小屋といっても、これは、そう称びならされているだけで、馬が飼われていたのは、二百年前のことだった。大名行列の助郷用の伝馬として飼われていたという。もちろん、その馬小屋はあとかたもなくなくなり、現在建っているのは、後楽園の園丁が住んでいたばら家であった。その園丁が業病になって、亡くなったので、誰も怖れて近寄らぬままに、立ち腐れかかっていたのである。

朝吉は、須佐代が、なんのために、いまわしい馬小屋で、子を産もうとするのか、わからぬままに、かつぎ出そうとして、したたか、二の腕をかじられて、悲鳴をあげた。

やむなく、もぐり産婆をやっている近所の婆さんをひっぱって来て、いやがるのをおがみ倒して、とりあげてもらうことにした。

須佐代は、誰にも打ち明けなかったが、十六歳の時、

ある不良青年に、この馬小屋へひきずり込まれて、処女をうばわれたのであった。

須佐代は、憎むべき男を、憎むかわりに、いつとなく、なつかしい初恋人のように、胸に秘めていることに快感をおぼえるようになっていたのである。六十なかばの爺さんの情婦にされた、なげなきの反動であったかもしれない。

馬小屋で、産んだら、赤ん坊が、その男に、似るのではないか、と素朴なロマンチズムに駆られたのである。

朝吉は、いさましい産声をきき、婆さんから、「大砲持ちじゃ」と告げられると、赤ん坊の顔も見ずに、杖をついて、城下にある骨董店へ出かけて行った。

朝吉が、今日まで、どうにか飯が食えたのは、その骨董店のおかげであった。無類の好人物である朝吉をあわれんで、主人が、持ち込んで来るぶざまな狸や布袋を、引きとってくれたのである。

「生まれましてなあ、ひとつ、名まえをつけてつかわさんかな」

没表情で願う朝吉を、主人は、微笑しながら見まもった。

「種が古すぎるから、よう生きのびられるかのう」

「なにをいいんさる。ぼっこう（たいへん）景氣のええ産声をはりあげよりました。ただ、ちょっと、心配なの

は、須佐代のやつ、なにをひねくれよったか、馬小屋で産みよましてなあ」

これを奥の部屋できいていた、東京から帰省中の私立大学生の次男が、

「そりゃ、いい。キリストと同じだ。出世するぜえ」といった。

それがヒントになって、朝吉は、「切人」という名をもらって、店を出た。

切人——人を切る、などとは、とんでもない、いくら姦淫の子でも、侮辱もはなはだしい、と慍ったのは、骨董店の長男であった。彼は殿で、かねてから、父と弟とは、仲がよくなかったため、この抗議は、抗議だけに、とどまった。

かくて——。

戸田切人は、最低の条件のもとに、嘲笑をあげつつ、この世にその存在をあきらかにしたのであった。

三年後の秋に、朝吉は、ある朝、珍しく欲情を催して、切人をおもてへ遊びにやっておいて、営みをはじめたが、急に、妙な唸り声をひとつこの世に残して、ぐったりしてしまった。

腹の上から、朝吉をおしのけて、起き上がった須佐代が、まず思ったのは、夜のうちにいつの間にか死んだことにしよう、ということだった。

だが、この計画は、皮肉にも、わが子によって、ひっくりかえされてしまった。

切人は、弔客の一人の問うままに、戸口の隙間から覗いた光景を、すなおにしゃべってしまったのである。おかげで、母親から、きちがいのように、ぶんぐられたが、正直にしゃべったために、どうして折檻せうがんを蒙らねばならぬのか、納得なつとくがいらず、齒をくいしばって、涙をこぼさなかった。

城下の骨董屋の好意で、須佐代は、かよい女中になり、切人は、一日中ひとりぼっちにされる運命になったが、これは、後年、どんな場所に置かれても、即座にその世界で自分の能力を発揮すべき仕事を見つける行動性をつちかうのに大いに役立った。

小学校に上がったところから、骨身を惜しまぬ行動性は、大いに、同級生にとって、便利であった。

成績は、中の下ぐらいのところ、母一人子一人で、貧乏である条件は、同級生たちに、切人をこき使うことが、当然であるかのように錯覚せしめた。三年生になったころには、その生涯に関する一切が、クラス中に知れわたっていたので、いよいよ切人が与えられる労働は、過重なものとなった。一番イヤな、面倒くさい仕事は、ことごとく、切人の役割となり、これを、本人自身が、すこしも疑わずに、引き受けたのである。そして、いつ

の間にか、教師も、切人をそういう存在と看做みかしてしまっていた。

五年生になった春の一日――。

切人は、自分の人生にとって、はじめて、自覚し、決意しなければならぬ事件に逢着ほうしやくした。

学校からのもどりを、旭川畔あさひがはで道草を食うのを日課にしている切人は、その日も、鞆たもの中の空の弁当箱を、カチャカチャ鳴らしながら、堤を歩いていった。

後樂園につづく森の彼方に、鳥城とりしろと称ばれる岡山城が、薄墨でぼかしたように、潤んだ森の水蒸気に溶け込んで、花曇りの下にそびえていた。

物心ついたところから、仰いでいる城の偉容が、切人の心に、ひとつのイメージをつくりあげていた。

そのむかし、伊勢田のお殿様は、あの城に住んで、この岡山中の人間を家来にしていたのである。

――わしも、大人になって、金儲けをしたら、城をつくってやる。

漠然と、そう考えているうちに、だんだん、それが、自分が生まれて来た目的のように思えて来たのである。これは、途方もないはずかしい空想だから、切人は、母親にも、口をすべらしたことはなかった。

切人の空想では、旭川をへだてて、鳥城のむかいに、鳥城よりもひとまわり大きな城を築く予定であった。鳥

城は、まっ黒だから、自分の城は、まっ赤にしたかった。

今日も――。

切人は、とっくりと、烏城の偉容を觀賞すべく、まわりに同級生の姿がないか、すばやく、目をくぼった。

とたんに、切人の顔色が変わった。心臓が、どきどきした。

堤の斜面に、和服姿の青年が、腰をおろしていた。

それは、まぎれもなく、烏城城主伊勢田侯爵のおん曹子であった。

四、五日前、切人は、母親を迎えに骨董店に行った時、店から、ぶらりと出て来る青年の、まるで死人のように蒼褪めた顔色に、ぎよつとなつたものだったが、あれが伊勢田の若様だ、ときかされて、二度仰天したのである。お殿様が、一人で街をぶらぶら歩くのが、ふしぎに思われた。お殿様は、二十人も三十人もお供をつれているものとはかり、思っていたのである。

切人は、そうと、その蒼い横顔をうかがった。

黙って、川の流れを、眺めている。

怖かった。

しかし、どうしたのか、切人は、ひきかえすことも、背後をすり抜けて行くこともできなかった。

伊勢田の若様と自分と、たった二人きりで、この堤に、いることが、なにか、すばらしい秘密のように感じられ

た。

と――。

切人は、若様の片足に、下駄がないのに、気がついた。視線を下方へ移してみると、濡れた磧へころがり落ちている。

次の瞬間、切人は、小さなけもののような素早い行動を起こした。

下駄をひろいあげて、ちらと、若様をふり仰ぐと、若様も、自分を見おろしている。切人の胸の動悸は、最高潮に達した。

切人は、勇気をふるい起こして、斜面をのぼった。

伊勢田直政は、目玉の大きな薄穢い小僧が、自分が落とした下駄をひろって、のぼって来るのを、野良犬でも近づいて来るように、眺めた。

切人は、そこへ立ちどまると、目蓋をせわしく、またたかせた。

直政は、冷酷に、まっすぐに、見据えた。

切人は、視線を、直政の足へ落とし、また直政を眩しげに見やり、それから、そっとしゃがんで、その足へ、下駄をはかせた。

直政は、やおら、腰をあげた。その瞬間であった。

切人が、突如、「ひゃっ！」と悲鳴をあげた。

直政が腰をあげるとともに、その下から、鼻も曲がるような強烈な臭気が湧き出たのである。

直政は、野糞の上へ、腰をおろしていたのであった。

夢中で、とびあがった切人は、直政のうしろを覗いて、「いけんがなあ！ ついとるがなあ！」

と、なさない叫びをあげた。

結城紬の羽織の裾に、カレーライス色の汚物が、べったりと、へばりついている。

「おととい、わしが、やったんぞな。いけんがなあ！

こらえてつかわさい」

切人は、いきなり、自分の服の端で、汚物を、拭いとうとした。

直政は、その手をはらいのけた。

切人は、びくんと全身を顫わせて、首をちぢめた。なぐり倒される、と怯えた。

しかし、直政は、なぐり倒すかわりに、ゆっくりと、堤の上へ、上がった。

切人は、大急ぎで、その前へ、回って、べこんと頭を下げた。

「こらえてつかわさい。若様が、おいでんさるのが、わかっていたら、わしは、やらなかったんぞな。ほんとぞな」

「……………」

直政は、切人の真剣な表情を見やうっているうちに、その蒼白な頬に、妖しい微笑をうかべた。

少年の敏感な本能が、微かな恐怖を生んで、ひと足さがらせた。

「お前、十円欲しくないか？」

「……………」

切人は、唐突な質問に、きよとなった。

当時の十円といえば、今日の五千円ぐらいに相当する。十銭玉さえもにぎったことのない切人には、いきなり

そう訊かれても、咄嗟にピンと来なかった。

直政は、袂をさぐって、数だらけの十円札をつまみ出すと、切人の鼻さきで、ひらひらさせた。

「見たことがあるか？」

切人は、かぶりをふった。

「一円の十倍、十銭の百倍、一銭の千倍だ」

「……………」

「一銭で、何を買える？」

「パッチンが十枚、買える」

パッチンというのは、武者絵のついたメンコのことであつた。

「それなら、この十円札で、一万枚買えるぞ」
切人は、ふえーっ、と驚嘆の叫びを發した。

「欲しいか？」

「欲しいぞな」

「よし——」

直政は、羽織を脱ぐと、つき出した。

「これを、きれいに、なめろ。そうしたら、この十円札をくれてやる」

切人は、ぐくつと生唾をのみ込んだ。

「いやか？」

一瞬、直政は、凄惨な形相になった。

切人は、反射的に、両手で頭をかかえると、上目づかに、直政を仰いだ。

「いやか？」

直政は、かさねて訊いた。

「ううん——。うんにゃ！」

切人は、かぶりをふった。

「じゃ、なめろ。きれいになめろ」

「ほ、ほんとに、そ、それを、つかわさるんかな？」

「やる」

「ほんとじゃな？」

「くだい！」

切人は、羽織を受けとった。

直政の眸子は、異常にきらきらと光った。

——えいんじゃ。わしが、たれたもんじゃもの！

切人は、自分にいきかせて、鼻をつまむと、そおと、汚物へ、顔を近づけた。

「鼻をつまむな！」

直政は、残忍な命令をくれた。

切人は、指を鼻からはなすと、目をつむった。

「目をあけろ！」

さらに、無様な叱咤があびせられた。

切人は、ぐつと吐に力をこめた。そして、思いきり長く舌を出して、汚物に近づけると、べろっ、となめた。とたんに、「げえっ！」と嘔吐感に襲われた。

すかさず、直政が、

「なめろ！」

と、呶号した。

……あとは、無我夢中だった。

どんな味がしたかもおぼえてはいない。とにもかくにも、唇と舌と歯を、これ以上せわしく働かせないぐらい活躍させて、きれいにしゃぶりとった。

それから、一散に、斜面を駆け降りて、積の石ころを飛んで、汀へ行くと、ざぶつと、水の中へ顔を浸けた。

吐こうとしたが、唾ばかりが出た。

ようやく、立ち上がった、振りかえった時、堤の上から、若様の姿が消えていた。

あつとなつて、駆けもどつて来た切人は、そこに、羽

織がすてられ、その上へ、十円札がのせられてあるのを、見いだしたことだった。

押入れの奥につっこんでおいたその羽織が、母親に発見されたのは、十日ばかり後のことだった。

「伊勢田の若様に、もううた」

という弁解が、信じられるわけはなかった。

切人は、自分がたれた野糞をなめた報酬だ、とはどうしても打ち明けられなかった。

須佐代は、ほかにも何か盗んだものはないか、と、責めたて、畳の下にかくしてある十円札を、とり出させることに成功した。

切人は、畳につつ伏して号泣する母親を見おろしながら、

——若様に会えば、みんなわかるんじや。
と、自分に呟いた。

だが、少年の単純な正直心は、そのまま、ひねくれた大人の世界には通用しなかった。

二

その夜、伊勢田家の奥座敷では、前夜も前々夜もそうしていたように、直政は、炬燵の櫓へ脚をのせて、仰臥し、死んだように、目蓋をとしていた。

伊勢田家といっても、宏荘な本邸は、東山の麓にあり、ここは、岡山駅と練兵場のほぼ中央に位置する南方という町のはずれに建てられた、古びた藁ぶき家であった。家令をつとめて、生涯独身で通した男が、晩年、中風を患って、寝ていた家で、その男が逝って以来、五年あまり閉じられていたのである。

直政が、帰郷して、本邸にはいなかったのは、謹慎の身だったからである。

前年、共産党が一網打尽にされた時、東大生の直政は、シンパとして捕ったのである。直政の母は、西久邇宮家から降嫁していたので、皇族と華族でつくっている桜菊会ではただちに会議をひらき、警視総監に抗議して、直政を釈放させたのであったが、すでに、新聞記事にされてしまっていたので、やむなく、新聞記者の目にふれさせぬように、半年間、赤倉スキー場にある西久邇宮家の別荘へ閉じこめておき、今年になって、ようやく、岡山へ帰るのを許したのであった。

直政は、高校時代から肺結核が、かなり進行していて、そのために、自暴自棄になっているのだと周囲の者たちは、見ていた。

いずれにしても、誰ともほとんど口をきかず、孤独の世界に閉じこもってしまっているきりなので、直政が生まれた時から、そばに仕えている女中の多喜にも、彼が、

「いったい、何を考えているのか、見当もつかなかった。」

直政が、帰郷以来、自分から足をはこぶのは、城下の骨董店だけであつた。べつに、主人や長男と座談するわけではなく、仏像や仏画を座敷に出させ、しばらく、黙念もくねんして行くだけであつた。

「お茶を、どうぞ——」

多嘉がはいって来て、すすめた。

直政は目蓋をとじたまま、身じろぎもしなかった。

多嘉は、立つて行つて押入れからかいまき襦巻をとり出すと、そつと直政の上へかけてやつた。

「おい——」

直政は、多嘉が出て行きかけると、目蓋をとじたまま、ふいに、呼んだ。

「はい」

返事をして、すわると、

「お前、いくつになつたんだ？」

「三十……八でございます」

十六歳で、直政の子守として、伊勢田家に上がつて、そのまま、二十二年間を、なんとなく過すごしてしまつたのである。

「お前……。お前は、まだ、男を知らんのだろう？」

唐突に、そうあびせられて、多嘉は、あきれて、直政の寝顔を見やつた。多嘉にすれば、じぶんが手塩にかけ

て育てた、息子むすこ同然の直政であつた。

この質問は、最大の侮辱であつた。しかし、腹をたてるよりも、あきれたのは、多嘉の人柄のよきであつた。

多嘉が、無言でいる気持が、もとより直政に、わからぬはずはなかつたろう。

にもかかわらず、直政は、意地悪く、

「処女なんでしょう。そうだろう」

と、たたみかけた。

——どうして、こんなに、人が変わつておしまひになつたのだろう。

多嘉は、なさけなかった。

——やはり、御前様と奥様が冷たくていらつしやつたから。

これは、直政が、少年のころから、多嘉が、感じていたことだつた。

伊勢田侯爵は、十数年も英国へ行きつぱなしだつたし、夫人は、慈善事業に熱中して、毎日外出していたのである。

「……それとも、黒崎（顧問弁護士）の野郎あたりに、こっそり、やられているのか？」

「若様——」

多嘉は、かなしげに、かぶりをふつた。

直政は、急に激しく咳込んで、ごろつと俯うつ伏した。

多嘉は、いざり寄って、そのせなかを撫でようとした。とたんに、その手を、直政に、掴まれた。

多嘉は、擡げられた直政の眸子が、血走って、きらきら光っているのに、ぎくっとなって、本能的に、全身をすくめた。

直政が、とった行動は、直截であつた。

左手で、多嘉の二の腕を掴みながら、右手を、膝のあいだへ滑り込ませようとした。

「若様！」

多嘉は、小さな悲鳴をあげて、拒んだ。

「な、なにを、あそばします！ そ、そんな——」

すると、直政は、ぐっと炬燵から、からだをせり出すと、顔を、膝へ押しつけた。

……くっ、くっ、くっ、奇妙な鳴咽をあげはじめたのである。

多嘉は、直政を、ひきはなすことができなかった。直政の顔のあたたかみや重さが、一種の心地よさで、からだに浸み、広がった。

いつの間にか、やさしく、願えるせなかを撫でていた。「……おれは……おれは……さびしいんだ」

鳴咽のあいだから、その言葉が洩らされた時、多嘉も、泪ぐんだ。

直政は、多嘉の胸へ、よじのぼって来た。

ささえきれずに、うしろへ倒された多嘉は、もう、直政の口が、唇にふれて来ても、顔をそむけようとしなかった。

あわれな息子を、せめて、ひとときでも、母の無限の愛情でつつんでやりたい——。言葉に表現すれば、そんな感情を、多嘉は、この行為に對する弁解として、用意した。

女性というものは、自身に對して弁解が成り立つと考えるや、いかなる非常識な行為でも、さまで良心に咎めずに、やってのけるものである。

直政は、多嘉の顔から顔を擡げた。その眼眸は、きわめて冷静な色を湛えていた。鳴咽も口説きも、演技だったのである。

目蓋をとじた多嘉の容貌は、仏像の無心な表情に似ていた。それが、直政に、犯す快感をおぼえさせた。

多嘉は、着物の前が巻くられようとした刹那、反射的に、両手をさしのべかけて、帯の上あたりで止めた。

物心ついて以来、広げられたことのなかった股は、つきたての餅のように、柔らかに白かった。

……やがて。

微かな疼痛の後に、からだの中に、きっちり、一杯に詰まるのを、多嘉は、感じた。

ふしぎなことに、この瞬間、多嘉は、じぶんが、母であることも、はっきりと感じた。(目蓋を閉ざしている多嘉は、じぶんの顔を、仏像の貌に見たてて、凝視している直政の、酷薄な表情を見なかったから——)

廊下に、蹻音がきこえるやいなや、多嘉は、柔道の達人のような素迅さで、直政を、はねのけて、さっさと起き上がった。

勝手働きの年とった女中が、

「お多嘉さま。城下の正木さんが、おいででございませう」

と、告げた。骨董店の主人のことであつた。

多嘉は、俯つ伏したなりの直政の上へ、掻巻をかけなおしておき、大急ぎで、髪や着物のみだれをなおしてから廊下へ出た。

廊下を歩きながら、なお、からだの中に、きっちり、一杯詰まっている感覚がのこつていて、はじめて、彼女は、激しい羞恥をおぼえた。

客は、骨董店の主人だけではなかった。

正木の福々しい姿は、畳の上に在ったが、ほかに、上がり框に、女がうなだれて腰かけており、その陰に少年がいた。

「だしぬけに、夜ぶんに邪魔しましたのう——」

正木は、挨拶を終えると、用件をきり出すかわりに、

持参した風呂敷包をひらいた。

中からあらわれたのは、直政の羽織であつた。

先日、たしかに着て出て行つたのに、羽織なしで戻つて来たので、どこかに忘れたのか、と尋ねたが、返事がなかったのである。

「これは、若様のでしょうか？」

「ええ、そうですけど……」

多嘉が、訝しげに見かえすと、正木は、三和土の母子へ顔をしゃくつて、

「これは、わしの店へ、かよいで手伝ひに来てゐる女子ですが、う、せがれめが、この羽織をかくしているのを見つけて、折檻したら、若様にもろうた、といいくさりよりましてな。しかも、あんた、十円札を添えて、もうた、とな。……いくら、若様が、慈悲深うても、そんならうちもない話は、きいたことがありますんでな。ともかく、母親が、ぜひあやまりに参じたいと申すんですから、まあ、つれて来たようなわけですて」

「それは、どうも……」

多嘉は、しかし、近ごろの直政の様子では、もしかすれば、気まぐれに、そんな真似をしたかもしれぬ、と想像できた。

「もし——そちらの、お子さん」

呼びかけると、少年は、ちよいと、母親の陰から、首